



# 私がみている

Time Line



# twitter

さえずり〔る〕； わななき〔く〕； くすくす笑い〔う〕； そわそわ（する）  
； さえずるように〔ぺちやくちや〕しゃべる

140文字以内の「ツイート」と称される短文を投稿できる情報サービス。ツイッター社によって提供されている。ゆるいつながりが発生し、広い意味でのソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の1つといわれることもあるが、ツイッター社自身は、「社会的な要素を備えたコミュニケーションネットワーク」であると規定し、SNSではないとしている。

## タイムライン(Time Line)とは

Twitterにおけるタイムラインとは、複数のツイートが時系列にならぶログ全体を指す。

自分がフォローしているTwitterユーザーが投稿したすべてのツイートが表示される長いストリームのこと。  
略称TL。





## セカイノハテの道順

@to spell the end

私が見知らぬ土地で歩いていたらとする。  
一見して旅行者という風体で。

それでも道を問う人は現れる。

「すみません」

老婆が、困ったように笑いながら  
私に声をかけてきた。

「世界の涯はどちらでしたか？」

ああ、それなら知っていた。

「ええっとですわね——」

涯の先は知らないのだけれど、ね。





## 待ち人は来ず

@Get them, before they disappear

僕は君を待っている。

君が、僕のプライドを踏みにじり、  
完膚無きまでに打ちのめしに来るのを  
待っている。

きっと、君は幸せそうに笑うだろう。

かわいらしい顔は愉悦で歪むだろう。  
砂糖菓子のように甘い声で終焉を告げる  
だろう。

僕は君を待っている。

そしてきっと——

君もその時を待っている。

↪ ↻ ★





## 欠けたる者を愛すること

@How I Learned to Stop Worrying  
and Love the her

「君の欠落を愛している」

そう男は笑った。

そして、反応さえしない少女の髪を  
梳きながら続ける。

「失われたから尊い、ミロのビーナスの  
腕と同じさ」

彼女はやはり答えない。一方的な愛情を  
ただ美しい瞳で眺めるだけ。

彼女は欠けている。

誰かを抱きしめることも、想いに応える  
こともない。





## 凍らせた記憶

@The girl ran away from home  
and cut loose from me control.

氷の棺で眠る少女がいた。

永遠に目覚めることはない。彼女が  
そう望んだから。

変わることなくそこに居る“私”を  
見つめ問いかける。

「ねえ、どんな夢をみているの？」

流れに贖った、過ぎし日の“私”は  
答えることはない。

閉じ込めて凍らせて、その日を、  
ずっと。

私が願った。これが罰だ。

↪ ↻ ★



## 旅の終わり

@No one realizes how beautiful it is to travel until he comes home and rests his head on his old, familiar pillow

生まれて初めて寝台列車に乗った。

昔読んだ小説に、夜の列車の窓に映る顔はデスマスクのようだ、という一節があって、ああ、そうかもしれないなとぼんやり考える。

流れる景色は闇に沈み、浮かび上がる自分の死顔。そう悪くない連想だ。

退屈で安寧な我が家への帰路は、いつも少しだけ寂しい。

↶ ↷ ★



## すべては箱の中

@a sleepy conscience

シュレーディンガーの猫をご存じだろうか。

思考実験の末、箱の中の猫は死ぬかもしれない。生き延びているかもしれないのだけれど。

つまり、私たちは結果を知るために介入しなければならないのだ。

箱の中に残されたのが災厄でも希望でも、見届けなければならない。

観測者でありたいのなら。







## 雨の日の甘い感傷

@treasure up in one's memory

窓の外を見やれば、灰青色の空から糸のような雨が降っていた。

さっき淹れ直した紅茶の入ったマグカップを手で包む。ほんのりとした温もりは昔繋いだあなたの手を思い出させる。

雨の日に消えたあなたも、そんな風に空を見ているだろうか。

同じように、私の気配を思い出しているだろうか。





## 露地は彼岸への掛橋

@Threatened men live long

夜咄の半東を務める事になった。

正客は一人。美しい女だ。

寄付でも一言も喋らない。ただ  
静かについてくる。

いや静かすぎる…不意にそう感じ  
正客を振り見た。

「半東さん、お忘れですか？」

さあっと血の気が引いていく。

どうして忘れられたのだろう、  
彼女は…

「あなたが殺した私を」





鳥籠の鳥は幸せなのか

@That was a very happy time

鳥籠の中で、今日も彼女は楽しげだ。

「手品をします」

唐突にそう言い出すと手にしたトランプを鮮やかにシャッフルし出した。

「いつの間に覚えたの？」

「内緒」

にこにこ、彼女は笑う。

ふたりでこうしてずっといられたらいいのにね。そう声にするのはやめて、今は彼女の手品を見ていよう。





## 赤紙

@a futile effort

父に赤紙が届いた日を覚えている。

「誉れだ」

と笑っていた。

骨も帰ってこなかったのに。

今でも舞台の上で他人を演じながら、  
そんな父を思い出す。

私の長い手足も切れ長の目も父譲り  
だが、考え方はまるで似なかった。

だから演じるのかもしれない。

理解したいと願っているからかも  
しれない。







## 去りゆく人を送る

@Forget-Me-Not

彼は旅人だった。

一所に留まることはなく、季節の移ろいのように去っていく。

出立の日、彼に問うた。

「寂しくはないの？」

「見たい景色があるんですよ」

それは置いていく私よりも素晴らしいものなんだろうか。

私を忘れないというこの人を、私は今すぐ忘れてしまいたかった。





## 塞翁が馬

@I'm more afraid of change  
than destruction

不思議を収集している、という老婆が訪ねてきたのは一週間ほど前の事だ。

品のよさを感じる綺麗な人で、問われるがままに答えたら、「謝礼です」と小さな箱を渡された。

「困ったら開けて下さい、か…」

私には嘘の匂いが判る。

だからこれが本物だと分かった。

箱の中までは解らないのだが。





## 人形の魔女

@chip words into a doll

「ますたー」

とてとて少年人形が私の方へ駆けてきた。

「いいカモきたー」

創る時に適当に知識を詰めただから、  
この子はあまり人前に出せない。

私の品位が誤解される。

「貴女が人形の魔女…？」

気位ばかり高そうな男が私を品定め  
する様に見ていた。

そう、命無き者に命を吹き込む私は  
魔女だ。





## お母さんの木

@The good die young

お母さんの木は裏の林にある。

大きなクスノキで、そっう呼んでいるのは私とお母さんとの秘密だ。

「お母さん、もうすぐお盆だよ」

お盆に帰ってきてきてくれたら、ふたりでまたお母さんの木の下でお菓子を食べるのだ。

クッキー、一人で焼けるようになったんだよって教えてあげなまやいけないから。







## 言の葉の蝶

@Up to you

彼の文字は蝶に似ている。

紙から浮かび出て、ひらひら浮遊する文字たちが一つの文章となっていく様はいつも美しかった。

一度、舞う彼の文字を捕えた事がある。それはすぐに墨に戻ってしまったのだが。

使い方を誤らなければいい、笑いながら彼は言った。そうすれば君の言葉も届くだろう、と。





## 対話篇

@If you can dream it,  
you can do it.

犬と暮らしている。

彼は聡明だから、フラトンと名付けた。

「君とずっと暮らしている気がする」

「どこかで出会っているのだろう。

それは生まれ変わる前かもしれないし、  
生まれ変わった後かもしれないが」

日差しが眩しくて、そう答えた彼の  
表情は分からない。

笑っていてくれたらいいのだけれど。



## 私がみているTL

<http://p.booklog.jp/book/86700>

この物語はフィクションです。実在のアカウント及び出来事には一切関係ありません。

著者：こいけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/38a1db/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86700>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86700>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ